國學院大學学術情報リポジトリ

ビジネス日本語文書における程度副詞について：「ますます」「いよいよ」「一層」「より」「さらに」を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朱, 大江 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000872

ビジネス日本語文書における程度副詞について

―「ますます」「いよいよ」「一層」「より」「さらに」を中心に―

朱大江

【キーワード】ビジネス文書マニュアル本　程度副詞の分類 使い分け
比較構文　比較対象

1.　はじめに

朱（2021）では、7 冊のビジネス文書マニュアル本を調査対象とし、27 語の常用副詞を選出している。その中で、程度副詞は、「ますます」「いよいよ」「一層」「より」「さらに」の五つがある。本稿では、この五つの副詞を対象とし、それらの（1）ビジネス文書での使用状況と（2）意味用法を明らかにし、ビジネス日本語教育に寄与することを目的とする。

2.　程度副詞の分類

ビジネス文書における五つの程度副詞の使用状況と意味用法を考察するためには程度副詞の分類を踏まえる必要があるが、先行研究によって分類の相違が認められるので、あらかじめ分類について整理を加えておくことにする。

2.1　五つの副詞の意味と本稿における扱い方

分類する前に、『現代副詞用法辞典　新装版』を引用し「ますます」「いよいよ」「一層」「より」「大変」の記述を概観する。

「ますます」について、『現代副詞用法辞典　新装版』は以下のように述べている。

> もともと程度がはなはだしいものがさらに程度を高めている様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。・・・同一の対象の過去の状態と比較して程度が高まったというニュアンスで、段階的な程度の高まりを主体が受け止める暗示がある。
>
> （p. 492）

この記述から、「ますます」は他者と比較できず、同じ対象の過去の状態と比較できる

程度副詞であるといえる。

「いよいよ」は、程度副詞としての用法もあるが、別の用法もある。本稿では、程度副詞としての「いよいよ」を分析対象とする。程度副詞としての「いよいよ」について、『現代副詞用法辞典　新装版』は以下のように述べている。

> ある状態の程度が高まる様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。（中略）好ましい場合にも好ましくない場合にも用いられる。同一の対象の過去の状態と比較して程度が高まったというニュアンスで用いられ、程度が段階的に最高に近づくことについて期待の暗示がある。複数の異なる対象を比較する意味はない。
>
> （p. 88）

「いよいよ」は、「ますます」と同じく、他者と比較できず同一対象の過去と比較できる程度副詞であるといえる。

「一層」について、『現代副詞用法辞典　新装版』は以下のように述べている。

> ある状態の程度が高まる様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。（中略）以前或いは他のものと比較して、程度が高まったというニュアンスで、必ず比較の対象がある。（中略）かなり客観的な表現で、程度が高まったことについて特定の感情は暗示されていない。二つの対象を比較する場合に用い、多数の中の一つを取り上げる場合には用いない。
>
> （p. 59）

「一層」は、二つの対象を比較でき、過去と比較できる程度副詞である。客観性が強いが、「ますます」「いよいよ」と違い段階的な程度の変化を表すことはできない。

「より」について、『現代副詞用法辞典　新装版』は以下のように述べている。

> ある状態の程度が高まる様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。（中略）かなり固い文章語で公式の発言や報道に用いられ、くだけた会話には登場しない。（中略）客観的な表現で、特定の感情を暗示しない。
>
> （p. 587）

「より」も客観性が強い語である。なお、「より一層」は「一層」の強調表現としてよく使用されている。『現代副詞用法辞典　新装版』では、「より一層」を一つの副詞として扱っているが、本稿では別々の副詞として扱う。

「さらに」について、程度副詞としての用法もあるが、接続詞としての用法もある。本稿では、段落の先頭に「さらに、」で始まり、物の追加説明をする接続詞としての用例は調査用例としない。また、「さらに」の後ろに打消しの表現「ない」などを伴い、打消しを強調する用法もあるが、これも対象にしない。ビジネス文書でこのような用法の「さらに」は見当たらなかった。『現代副詞用法辞典　新装版』は以下のように述べている。

> ある状態や行為の程度が高まる様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。（中

略）以前或いはほかのものと比較して、何かが付け加わることにより、程度が段階的に高まったというニュアンスがある。意志的な行為について用いられた場合には、継続の暗示が加わる。かなり客観的な表現で、程度が高まったことについて特定の感情は暗示されていない。

（p. 173）

「さらに」と類似している程度副詞として「もっと」があるが、『現代副詞用法辞典新装版』は「「もっと」が理想（基準）の状態と比較して現状が劣っていることを反省する暗示がある。」と述べている。また、陳（2010）は、「もっと」「さらに」の意味内容の違いを明らかにし、客観性が強い「さらに」と比べ、「もっと」は主観性が強い副詞であると論じている。「もっと」は「現状が劣っている暗示」がある主観性の強い副詞であり、また口語的でもあるため、ビジネス文書であまり使用されていないと考えられる。

2.2　従来の程度副詞の分類方法

程度副詞の分類方法に関する指摘は多い。

森山（1985）は程度副詞で「純粋に程度だけをあらわすもの」を「純粋程度副詞」、「量をあらわすもの」を「量的程度副詞」と分類している。また、仁田（2002）は、「非常に」のような程度だけを限定するものを「純粋程度の副詞」、「たくさん」のような数量だけを限定するものを「量の副詞」、「かなり」のような程度と数量の両方を限定することができるものを「量程度の副詞」と分類している。

渡辺（1990）は、比較構文に現れるかどうかを基準に、程度副詞を比較構文とかかわる「比較系」、比較構文と関わらない「発見系」とし、程度副詞を構文の特徴から分類している。中山（1996）は程度副詞がもつ程度の基準に注目し、「絶対程度副詞」「関係的程度副詞」「極限的程度副詞」「量的程度副詞」に分類している。

疏（2018）は、それまでに行われてきた分類法を三つのタイプに分けている。タイプ①：程度副詞が直接量を修飾できるかに注目したもの。タイプ②：程度副詞が比較構文に現れるかに注目したもの。タイプ③：タイプ①と②を融合させたもの。疏（2018）はまた、程度副詞40 語を分析対象とし、(1) 比較対象以外の事物を比較基準とする「他者基準」、(2) 比較対象が属する集合を基準とする「範囲基準」、(3) 比較対象が属する集合の平均値を基準とする「平均基準」、(4) 話し手が五感や感情を感じる最小識別量を基準とする「感覚基準」、(5) 量の全体すなわち100％を比較基準とする「全体基準」、(6) 相対的な空間位置や時点を決めるための参照点を基準とする「時空基準」、(7) 過去の比較対象自身を基準とするもので、自己の変化を表す場合に使われる「過去基準」、(8) 動作に関わる量を測るために単位量を基準とする「計量基準」の比較基準から、程度副詞を「もっと」類、「最も」類、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類、「とても」類、「極めて」類、「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類、「あまり」類の11 類に分類している。以上、程度

副詞の分類方法について概観してきたが、森山（1985）、仁田（2002）、渡辺（1990）、中山（1996）は、分析対象とする程度副詞が多いが、分類基準が詳細とは言いにくい。疏（2018）は、分類基準が新しく詳細であるが、対象とする程度副詞は多くない。

本稿で対象とする五つの程度副詞を、以上の先行文献の分類方法に従って分類すると、表１のようになる。

表１　五つの程度副詞の分類

	森山（1985）・仁田（2002）	渡辺（1990）	中山（1996）	疏（2018）
ますます	純正程度副詞	比較系	関係的程度副詞	対象とされていない
いよいよ	純正程度副詞	比較系	関係的程度副詞	対象とされていない
一層	純正程度副詞	比較系	関係的程度副詞	対象とされていない
さらに	純正程度副詞	比較系	関係的程度副詞	「もっと」類
より	純正程度副詞	比較系	関係的程度副詞	「もっと」類

森山（1985）・仁田（2002）と渡辺（1990）と中山（1996）は、各視点から程度副詞を大分類しており、上位カテゴリーの分類と言える。疏（2018）は、前の三つの分類方法と比べ、さらに詳細な分類方法で、下位カテゴリーの分類と言える。疏（2018）における「もっと」類は「他者基準」だけを満たすものであるが、筆者は「さらに」「より」が他の分類基準も満たし、「もっと」類に分類できないと考えられる。

3.　五つの程度副詞の再分類

ビジネス文書で多用される五つの程度副詞が日常生活で使用される時と異なる性格を持つため、ビジネス文書での意味用法を検討する前にそれらの分類を見直す必要があると考えられる。

疏（2018）が研究対象とする40語の程度副詞の中に「さらに」「より」はあるが、「ますます」「いよいよ」「一層」はない。朱（2021）は、疏氏の分類基準によると、「ますます」「いよいよ」「一層」と一番近いカテゴリーは「他者基準」「時空基準」「過去基準」を満たす「ずっと」類である。しかし、『現代副詞用法辞典　新装版』が「同一の対象の過去」と比較することと説明しているので、まず「ますます」「いよいよ」は「他者基準」を満たさない。また、「ますます」「いよいよ」「一層」は「時空基準」の「空間」の基準を満たしていないため以下の「ずっと」「かなり」「さらに」のような例文では使えない。

1.　聴音の結果から見る限り、目標は<u>かなり</u>東だ。（安芸一穂『時空の旭日旗』）

疏（2018）

疏（2018）の分類基準を用いて、この三つの副詞を分析する場合、「時空基準」を相対的な時点を決めるための参照点を基準とする「時間基準」と相対的な空間位置を決める

ための参照点を基準とする「空間基準」に分けて分類した方が適切だと考えられる。

なお、「一層」は「時間基準」と「過去基準」を満たすと同時に、「他者基準」も満たし、例文2のような例文で使える。

2.　この店はあの店より一層美味しい。　（作例）

この点では、「一層」は「ますます」「いよいよ」と異なっている。従って、「ますます」「いよいよ」を一つのグループにし、「一層」をもう一つのグループにする必要がある。「より」の性質は「一層」と近く、「一層」と同じグループに再分類できると考えられる。

渡辺（1990）の分類方法によると、「より」は「発見系」副詞ではなく、「比較系」程度副詞である。疏（2018）は、さらに「より」を明示的な比較[1]に属する「もっと」類に分類している。しかし、「より」は含意的な比較[2]の文でも使える。安達（2001）は、「より」を含む文の成立に「何らかの手段で比較の意味が含意される必要がある」と指摘し、具体的には（a）構文環境による含意（b）述語の語彙的な意味による含意を提示している。さらに、（b）の比較の意味を含意する動詞を「主体の漸次的な変化」「発見」「実現」「変化（客体の状態の漸次的な変化）」の四種類と分類している。以下は例文である。

a. 状況が好転する兆しはまったくなく、より悪化していてもおかしくないような状態だった。

（「主体の漸次的な変化」）

b. より有利な組み方を求めて頭を振るたびに、重く鈍い音が客席まで響いてくる。

（「発見」）

c. 与野党がせめぎ合い、競い合って、人々の前で、よりよい政治を実現する。

（「実現」）

d. とくにオペラの場合は、幕あいの一杯の酒がより華やかな気分をもり上げてくれる。

（「変化」）

（安達2001、pp. 15-16より）

安達（2001）の（a）は明示的な比較構文と理解でき、a～dの例文から（b）は含意的な比較構文と理解できる。

帰（2018）は、国立国語研究所が開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』の「中納言」を利用し、副詞とする「より」の用例を930例集めて、比較基準が文中と文脈に現れるかどうかによって分類した結果、現れないものが529例で、半数

---

[1]疏（2020）によれば、明示的な比較の比較基準は文中の成分や先行文脈によって明示される。

[2]疏（2020）によれば、含意的な比較では比較基準が文に含意されているため、文中に明示される必要がない。

以上占めている。さらに、帰（2018）は安達（2001）と高水（2003）を踏まえて、比較基準を表す成分が文中と文脈にも現れていないものをⅰ述語の語彙的な意味による含意（「主体程度変化」「対象程度変化」「生産・実現」「期待」「位置変化」、ⅱ文のモーダル（ムード）な意味による含意（「より」と当為・評価のモダリティ形式との共起、「より」と意志・命令・依頼・願望のモダリティ形式との共起）ⅲ構文的な意味による含意（従属節）と分類し、それらの共通性を検討している。つまり、安達（2001）と帰（2018）の二つの先行研究は「より」が含意的な比較基準で使えることについて論じている。

従って、副詞とする「より」は、明示的な比較基準と含意的な比較基準両方の比較構文で使用できる。「もっと」類に分類できず、「過去基準」と「時間基準」も満たす。

五つの比較系程度副詞の分類基準を見直したのか以下の表2である。

表2　「ますます」「いよいよ」「一層」の分類基準

	時間基準	空間基準	過去基準	他者基準
ますます	○	×	○	×
いよいよ	○	×	○	×
一層	○	×	○	○
より	○	×	○	○
さらに	○	○	○	○

以上の分類基準に基づき、再分類した結果、「ますます」「いよいよ」を「ますます」類グループに、「一層」「より」を「一層」類グループに、「さらに」を「さらに」類グループに分類する。次の節から、ビジネス文書における各語の使用状況を明らかにする。

4.　調査資料

本稿ではビジネス文書における使用状況について、以下の7冊のビジネス文書マニュアル本[3]を調査対象とする。便宜上、それぞれの資料を以下A～Gとする。また、ビジネス文書を、社内文書と社外文書と社交文書に分けて考察する。

(A)　『そのまま使える「ダウンロード特典付き」ビジネス文書例集』
　　横須賀てるひさ/藤井里美（著）岡田哲/諸星美智直（監修）（2008）かんき出版

(B)　『そのまま使えるビジネス文書458文例 in　CD-ROM』
　　長峰洋子/田辺麻紀（著）　（2003）こう書房

(C)　『最新決定版！CD-ROM付きビジネス文書基本文例230』

[3]ビジネス文書マニュアル本は、ビジネス文書の例文集である。

志田唯史（著）（2003）オーエス出版社

(D)『最新版会社・文書・文例全書 800 文例 CD-ROM 付 』
日本実業出版社出版（2002）

(E)『必要な文書がすぐ見つかる CD-ROM 付きビジネス文書文例集』
山瀬 弘（著）（2002）池田書店

(F)『すぐに使えるビジネス文書実例集』
ビジネス文書マナー研究会（著）（2006）ナツメ社出版

(G)『すぐに使え応用がきくビジネス文書文例事典』
鈴木 あつこ（著）（2010）新潟出版

5. ビジネス文書における五つの程度副詞の使用状況

7冊における五つの程度副詞の使用状況を以下の表3に示す。五つの副詞がそれぞれの文書に出現する数と割合を集計した。

表3　ビジネス文書における五つの副詞の使用状況

	社内	社外	社交	合計
ますます	31（2.32%）	744（55.73%）	560（41.95%）	1335
いよいよ	0（0.00%）	90（61.64%）	56（38.36%）	146
一層	16（6.87%）	40（17.17%）	177（75.96%）	233
より	13（12.75%）	38（37.25%）	51（50.00%）	102
さらに	13（22.03%）	16（27.12%）	30（50.85%）	59

五つの副詞は社内文書での使用が少なく、社外文書と社交文書で多用されている。「ますます」「いよいよ」は、社外文書の用例数が社交文書の用例数より多いのに対して、「一層」「より」「さらに」は社交文書の用例が社外文書の用例よりはるかに多く使用されている。

五つの副詞の中、「ますます」「いよいよ」は前文或いは末文の挨拶文で主に使用されている。「一層」は、挨拶文で使用されている用例があるが、依頼文で主に使用されている。「より」「さらに」はあまり挨拶文で使用されておらず、様々なところで使用されている。各副詞についての具体的な考察を次の節で行う。

6. 五つの副詞の意味用法

6.1 「ますます」

呉（2019）は、ビジネス文書における「ますます（益々）」について、(1) ビジネス文

書の前文で頭語、時候の挨拶、相手の繁栄や安否を慶賀の挨拶の順番で進展する。(2)全てが社外に対する場合で用いられるという二つの特殊を持つことと指摘している。呉（2019）の調査資料と異なるが、「ますます」が最も多く使用される「という使用傾向と変わりはない。「ますますご隆昌（隆盛・清栄・清祥）のこととお慶び申し上げます。」は、「ますます」が最も多く出現している挨拶文型である。祝い状や礼状などの社交文書だけではなく、交渉状、依頼状、断り状などの社外文書でも使用されている。メールや手紙の内容に関わらず、他社へ連絡する際に、とりあえずこのような挨拶文を前文に書くのが顕著に見られる傾向である。例文を以下に示す。

3.　貴社**ますます**ご清栄のこととお慶び申し上げます。

（資料C　社外文書　礼状）

4.　**ますます**のご活躍を祈念して、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

（資料A　社交文書　お祝い状）

例文3、4は、ビジネス文書の前文で失礼にならないように使う儀礼的な表現である。なお、「ますます」は前文の挨拶文型以外での使用例もあるが、極めて少ない。呉（2019）では同じ用法の用例も2例出現している。この用法は日常生活でよく使われる用法であるが、ビジネス文書での常用用法ではない。例文を以下に示す。

5. さて、当社では全社的な体質強化を図り、あわせて**ますます**多様化してまいりました市場に的確に対処するため、下記のように機構および人事を改めました。

（資料D　社交文書　挨拶状）

6. 長年にわたる堅実な経営で**ますます**信用厚く、めでたくこのよき日をお迎えになりましたことは誠に喜ばしく、輝かしい伝統と歴史に心から敬意を表する次第でございます。

（資料B　社交文書　祝賀状）

7. 今後は**ますます**多忙を極めると存じますので、ご自愛のほどをお祈りいたしております。

（資料B　社交文書　祝賀状）

8.　これを機会に心を新たにし**ますます**精進いたし必ずや皆様のご期待にお応えする決意でございます。

（資料D　社交文書　礼状・感謝状）

例文5と6の「ますます」は、同一対象の昔の状態と比べて段階的な変化があることを強調している。「過去基準」を満たす使用例である。

例文3、4と例文7、8の「ますます」は、同一対象がこれからの段階的な変化があることを強調している。このような「ますます」の比較対象は、今と未来であり、「時間基準」を満たす使用例である。

以上の例文分析によれば、「ますます」は、物事が時の経過とともに段階的に変化する様子を表すといえる。

6.2　「いよいよ」

パリハワダナ（2011）は、「いよいよ」の意味用法を2分類して、1)「焦点の局面への近づき・到達」と2)「進度の度合い拡大」に分類している。さらに1）の用法を⒜出来事の成立時期を描写する場合と⒝極限状態を描写する場合と⒞事態にたいする予測が確定的となったことを表す場合に分けている。1）が時間副詞としての用法で、2）は程度副詞としての用法である。

ビジネス文書では、例文9のような「出来事の成立時期を描写する」用法と例文10のような「事態にたいする予測が確定的となったことを表す」用法がある。本研究においてこのような用例は合計22例収集されたが、程度副詞の用法ではないため、研究対象外とする。

9.　さて、かねてよりご建設中の新社屋、**いよいよ**ご完成されるとの由、まことにおめでとうございます。

（資料C　社外文書　詫び状）

10. 経費の切り詰め、人員削減による社内合理化など、あらゆる手を尽くしてこれまで現状維持に努めてまいりましたが、**いよいよ**卸価格の値上げより手だてがないという結論に達しました。

（資料F　社外文書　交渉状）

程度副詞としての「いよいよ」は、前文の挨拶文で多用される。「ますます」と同じ文型で使用され、同じ意味合いを持ち、お互いに置き換えられると考える。例文は以下に示す。

11. 貴社**いよいよ**ご盛栄のこととお喜び申し上げます。

（資料F　社外文書　抗議状）

12. 清涼の候、皆様方には**いよいよ**ご健勝のこととお慶び申し上げます。

（資料C　社交文書　招待状）

例文9～12は、例文3、4と同じく、「時間基準」を満たす用例である。前文の挨拶文以外での使用は例文13しかなく、「時間基準」を満たす使用例である。

13. ヒーリングについての関心はこれから**いよいよ**高まっていくと思われます。

（資料F　社交文書　礼状）

程度副詞としての「いよいよ」について、『現代副詞用法辞典　新装版』では「程度が段階的に最高に近づくことについて期待の暗示がある。」と記述している。このような暗示があるのは、程度副詞ではない「いよいよ」の「重大な時が到来する様子を表す」「判断がある一点に落ち着く様子を表す」意味からの影響かもしれない。しかし、人の意識や考え方など「最高」の上限は規定できないものだと考える。例文13では、人の関心の高さには「最高」の限度があると言い切れない。ビジネス文書以外で使用される「いよ

いよ」は、最高の限度に近づく意味合いを持っているかもしれない。しかし、ビジネス文書における程度副詞としての「いよいよ」は、段階的な拡大変化があるが、「最高に近づくことについての期待の暗示」はないと考えられる。

ビジネス文書における程度副詞としての「いよいよ」の使用例は、全て「ますます」に置き換えられる。しかし、「いよいよ」は述語にかかり、名詞にかからないため、例文3、例文4の「ますます」は「いよいよ」に置き換えられない。「いよいよご活躍されることを祈念する。」に書き換えるなら、「いよいよ」が使える。例文8の「ますます」を「いよいよ」に置き換えるのは文法面では間違いないと言えるが、「いよいよ」を使う例文の認識度はより低くなる。

前文の挨拶文で使用される「いよいよ」の用例数を除いた程度副詞としての「いよいよ」はわずか2例しかなく、時間副詞としての「いよいよ」の16例と比べて少ない。パリハワダナ氏は、『新潮文庫100冊（CD-ROOM版)』を調査資料とし、「いよいよ」の用例を集めており、1）の実例数は91例（70.0%）であるに対し、2）の実例数は39例（30.0%）であると指摘している。今回の用例調査結果とパリハワダナ氏の調査結果から見ると、「いよいよ」は、ビジネス文書で主に程度副詞として使用されている一方、ビジネス文書以外で主に時間副詞として使用されているといえる。

6.3　「一層」

「一層」はビジネス文書全般に使用されている副詞といえる。述語と名詞にかかり、述語にかかるより「一層の」の形で名詞にかかる場合が多い。「一層」の用例を分類すると、(1）前文の挨拶文での使用例と（2）本文中での一般的な使用例と（3）末文の依頼文での使用例と（4）末文の祈願文での使用例に分けられる。各用法の用例数と割合を以下の表4にまとめる。

表4　「一層」の用例分類

	前文の挨拶文	本文中の一般的な用法	末文の祈願文	末文の依頼文	合計
例文数	5	67	40	121	233
割合	2.15%	28.76%	17.17%	51.93%	100.00%

「一層」は、「ますます」「いよいよ」と同じように前文の挨拶文で使用されるが、用例数は少ない（例文14)。本文中での使用は日常用語としての一般的な用法である（例文15、16)。前文より末文での使用が多く、祈願文として挨拶文の一種と考えられる（例文17、18)。末文の依頼文での使用例が最も多く、「一層」の主な用法と考えられる（例文19、20)。各例文を以下に示す。

14. 御社におかれましては、**一層**ご隆昌の由お喜び申し上げます。

（資料A　社外文書　申込書）

15. 両機能を併用することにより、**一層**の業務の効率化が図れます。

（資料A　社内文書　上申書）

16. このうえは、**一層**気を引き締めて社業に邁進するとともに、皆さまのご期待にそうよう全力を傾ける覚悟でございます。

（資料C　社交文書　礼状）

17. ついては、離任・赴任に当たり、下記の諸点に注意して、速やかに引継ぎを完了させ、新任地でいま**いっそう**の活躍を期待します。

（資料D　社内文書　命令・指図書）

18. これを機に今後なお**いっそう**のご躍進を遂げられますよう心からお祈り申しあげます。

（資料E　社交文書　祝賀状）

19. 今後、より**いっそう**の品質チェックをお願いしたいと存じます。

（資料F　社外文書　抗議状）

20. これを機に社員一同、より精神してまいりますので、なお**一層**のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（資料G　社交文書　挨拶状）

「一層」は二つの対象を比較できるが、ビジネス文書での使用例で全て同一対象の比較で、「他者基準」を満たす用例は見つかっていない。また、ほとんどが将来について語る例文で、現在或いは以前より程度が高まる様子を表す。「一層」はビジネス文書の様々なところで使用されているが、用法は単純であると言える。前文の挨拶文と末文の祈願文で使用される「一層」は「ますます」に置き換えられる。「一層」が段階的な変化の意味を持っていないため、文書の意味が若干変わるが、挨拶と祝福の意味は変わらない。例文16、17の「一層」を「ますます」に変えても非文にはならないが、違和感がある。「両機能の併用」をもたらした効率化が一気に出てくるからである。引き締めて社業に邁進する覚悟が少しずつ強くなるとおかしい話になる。依頼文で使用される「一層」も「ますます」に置き換えられない。例文20は品質チェック改善の依頼で、一気に完全に改善するのが目標で、段階的な改善では不十分である。例文21は支援を求める依頼で、今までの支援より良い支援を求めているため、段階的な変化の意味を加えると不自然な文になる。なお、「より一層」と「なお一層」は慣用表現であり、「一層」を強調する意味である。

つまり、「ますます」「一層」は程度が高まる様子を表すことができるが、「ますます」が段階的に高まるのに対し、「一層」は一気に高まる様子を表す。ビジネス文書の挨拶文と祈願文では、両副詞をお互い置き換えることができ、ニュアンスの差が生じるが、間違いにはならない。それ以外の場合では、互いに置き換えられない。

6.4　「より」

工藤（2012）は、「よりよい」の「より」を接頭辞としても扱っているが、本稿では「よい」を修飾する副詞として扱う。

「より」はしばしば修飾する部分と離れることがある。工藤（2012）は、朝日新聞の「より」の使用例「より透明性を高めるよう求めた」に対し、「せめて語順を変えて、「透明性をより高めるよう」とすべきところであった。」と指摘している。ビジネス文書では、「今後はより検査体制を強固にする所存でございます」のような用例もある。「より」の修飾対象が判明しない用例に対し、工藤（2012）は「格助詞か副詞かそれ以外か、曖昧なままに放置せず、しかと措辞を整えるべきだ」と指摘している。程度副詞としての「より」は日常生活でもビジネス文書でも「より」の主な用法ではなく、修飾する対象が曖昧なので、日本語学習者にとって習得しにくい副詞であると考えられる。

ビジネス文書で程度副詞としての「より」は、全て含意的な比較構文に属し、比較対象が明示されていない。

21. 今後とも**より**よい製品、サービスをご提供してまいりますので、倍旧のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

（資料G　社外文書　依頼・交渉状）

22. 新製品は**より**高度な機能を持ち、軽量小型、カラーも豊富です。

（資料B　社外文書　依頼状）

23. つきましては、サービス内容を**より**充実させ、皆様のご要望にもきめ細かくお応えしていく所存でございますので、なにとぞ今後とも一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

（資料F　社交文書　挨拶状）

24. この機会を存分にご利用になって、**より**ご理解を深めていただければと期待しております。

（資料G　社交文書　案内状）

25. 今後は微力ながら、皆様のご期待にそうべく、**より**いっそう職務に精励いたす所存でございます。

（資料F　社交文書　礼状）

26. このうえは役職員一同、**より**社業の発展に努力いたし、皆様のご期待に副う決意でありますので、何卒倍旧のお引立てを賜りますよう、お願い申し上げます。

（資料D　社外文書　通知状）

例文21、22は形容詞・形容動詞にかかる用例で「他者基準」「時間基準」を満たす。例文23は動詞にかかる例文で「時間基準」を満たす。この3例の「より」は修飾する語に直接にかかるため理解しやすい用法である。例文24、25、26は「時間基準」を満たす用

例である。例文24で、修飾する語は「より」の直後にある名詞ではかく、後ろの「深めていただく」になる。工藤（2012）の指摘通り、「ご理解をより深めていただければ・・・」の方がより適切な表現である。例文25のような副詞「一層」を修飾する用例が合計47例で、ほぼ半数を占めている。例文25の「一層」は後ろの動詞「精励いたす」を修飾している。また、例文26の「より」はどの部分を修飾しているのか[4]が日本語学習者にとって実に判断しにくい。このような「修飾する部分が曖昧である」例がビジネス文書で多用されているため、日本語教育現場で注意すべき項目であると考えられる。

「より」が「一層」を修飾し「より一層」になった形式は、末文の依頼文で使用され、前文の挨拶文では使用されていない。本文中の一般用法の使用例が最も多く、さらに「修飾する部分が曖昧である」ことがあるため、日本語学習者にとって五つの程度副詞の中で最も複雑な副詞であるといえる。

6.5　「さらに」

「さらに」の意味用法については、「一層」「より」より豊富である。『現代副詞用法辞典　新装版』のような2種類の意味があるとする立場の一方、『三省堂国語辞典第七版』の「あらためて。もう一度。」或いは『新明解国語辞典第七版』の「その段階で妥協したり、あきらめたりせず繰り返して行う様子」を追加し、3種類の意味用法と解釈しているものもある。林（2000）は、打消し表現との共起は検討していないが、「さらに」のそれ以外の意味を「Ⅰ異なる事物の比較」「Ⅱ異なる時点における同一事物の比較」「Ⅲ量の累加の場合」「Ⅳ事態の累加の場合」の四つの場合に分けて検討し、「もっと」「いっそう」「いちだんと」「ずっと」「よほど」「はるかに」との比較も行っている。林（2000）の場合Ⅰが「他者基準」に該当し、場合Ⅱが「過去基準」に該当し、場合ⅢとⅣが比較系構文から離れ、「その上に」の意味に該当すると考えられる。ビジネス文書における「さらに」の場合Ⅱ～Ⅳの使用があり、「他者基準」としての使用は見当たらなかった。用例を以下に示す。

27. あなたの、本社での市場開拓における高い実績を評価するとともに、新任地における活躍を**さらに**期待するものです。

（資料D　社内文書　命令・指図書）

28. 今後とも**さらに**一層のご発展ご躍進をなさるようお祈り申し上げます。

（資料D　社交文書　祝賀状）

例文27、28は、同一の物事の過去とこれからの未来との比較になる。「一層」「より」の用法は似ており、お互いに置き換えられる。「一層」「より」「さらに」は、比較構文「XはYより＜程度副詞＞A」で使える副詞だが、ビジネス文書で使用されるとき、

[4]「より発展」か「より努力する」かとのこと。

Xが「ある時点でのある物事」に、Yが「それ以前の時点での同一物事」に限定され、常に明示されておらず、二つの物事の比較は見当たらない。このような比較構文で使用される「さらに」は42例あり、全用例の71.19%を占める主な用法である。

比較構文と関わらない「さらに」の用例は少なく、「累加」「その上に」の意味を表す。

29. この見積額でも当社に利益は出ないのですが、ここから**さらに**〇%の値引きをすれば当社の赤字は確実です。

（資料B　社外文書　断り状）

30. それをさらに７日間延長したいとは、いささか無責任なお申越しではないでしょうか。

（資料D　社外文書　拒絶状）

31. 〇〇百貨店は新聞にお詫びの広告を出し、**さらに**記者会見を行うほどの大事にいたりました。

（資料F　社内文書　進退伺い）

32. このような事態となりましたのは、当初の予想を上回る人気商品となり、**さらに**テレビで大きく取り上げられたこともあり、在庫が品切れになってしまいました。

（資料G　社外文書　回答状）

例文29、30が「量の累計」の使用例で、合計3例あり、全用例の5.08%を占める。例文31、32が「事態の累計」の使用例で合計14例あり、全用例の23.73%を占める。「累計」「その上に」の意味としての「さらに」は、比較ではないので「一層」「より」と置き換えられない。「さらには」は、「累計」「その上に」の意味としての「さらに」の強調表現である。

7.　まとめ

ビジネス文書における「ますます」「いよいよ」「一層」「より」「さらに」の五つの程度副詞の使用は日常生活での使用と異なる部分が多く存在する。ビジネス日本語教育に貢献するため、五つの程度副詞の特徴と使い分けを検討して、それぞれの副詞が常用される文型を明らかにした。

そのためにまず疏（2018）の程度副詞の分類基準を再検討し、五つの比較系副詞の再分類を試みて、「時間基準」「過去基準」を満たしている「ますます」「いよいよ」を「ますます」類に、「時間基準」「過去基準」「他者基準」を満たしている「一層」「より」を「一層」類に再分類した。「時間基準」「空間基準」「過去基準」「他者基準」を満たしている「さらに」を「さらに」に分類した。

その上で、ビジネス文書における各副詞の使用状況を明らかにし、それらの意味用法を検討した。

「ますます」は、ビジネス文書の前文の相手を祝福する挨拶文で多用される。程度副詞としての「いよいよ」は、「ますます」と置き換えられ、汎用性が「ますます」より低く、段階的な拡大変化があるが、「最高に近づくことについての期待の暗示」がない。また、「いよいよ」は、ビジネス文書で主に程度副詞として使用されている一方、ビジネス文書以外で主に時間副詞として使用されていることを明らかにしている。「一層」は、ビジネス文書全般に使用され、現在或いは以前より一気に高まる様子を表す。前文の挨拶文と末文の祈願文で使用される「一層」は「ますます」に置き換えられる。ビジネス文書での用法は全て同一対象の比較である。「より」は、全て含意的な比較構文に属し、比較対象がつねに明示されていない。同一対象の比較と他者の比較で使用される。修飾する語の位置が遠い場合があるため、日本語学習者にとって習得しにくいことがある。「さらに」の意味用法は、「一層」「より」より豊富で、「異なる時点における同一事物の比較」「量の累加の場合」「事態の累加の場合」の使用が認められる。

ビジネス文書における五つの程度副詞の分類について、「ますます」「いよいよ」は出現する場所が限られていて、前文で使用される比較系の副詞に分類できる。しかし、「一層」「より」「さらに」は、「ますます」「いよいよ」と異なり出現する場所が限られていないため、意味特徴から区別する必要がある。さらに、ビジネス文書における比較系の程度副詞については、ほとんどが同一対象の比較構文で使用されるのが共通の特徴であると指摘できる。

参考文献

安達太郎（2001）「比較構文の全体像」『広島女子大学国際文化学部紀要』9 号、広島女子大学、pp. 1-19

帰翔（2018）「副詞「より」の使用環境について―比較基準非顕在の文を中心に―」『東京外国語大学日本研究教育年報』22 号、pp. 1-16

工藤力男（2012）「ヨリ三態 ： 日本語雑記（後拾遺）」『成城文藝』220 号、pp. 25-31

工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院、pp. 178-198

疏蒲剣（2018）「現代日本語における程度副詞の研究」博士学位論文、名古屋大学大学院国際言語文化研究科

高水徹（2003）「比較副詞の容認可能性と文脈」『言語科学論集』9、京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座、pp. 137-149

仁田義雄（2002）『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』くろしお出版

林奈緒子（2000）「比較構文に出現する程度副詞について－「さらに」の分析を中心－」『筑波大学応用言語学研究』7、筑波大学、p. 1-14

パリハワダナ、ルチラ（2011）「「いよいよ」と通して見た出来事成立に対する話し手の捉え方」『京都大学国際交流センター 論攷』１、京都大学国際交流センター、pp. 45-61

森山卓郎（1985）「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20　、京都教育大学国文学会、pp. 60-65
中山恵利子（1996）「程度副詞の分類の試み―その程度・量・基準により―」『阪南論集人文・自然科学編』31（3）、pp. 75-86
飛田良文・浅田秀子（2018）『現代副詞用法辞典　新装版』東京堂出版
渡辺実（1990）「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23、上智大学国文学会、pp. 1-16

―国学院大学大学院博士課程後期―